



International Institute of Multi-cultural Studies

特定非営利活動法人

# 国際比較文化研究所

Newsletter

Vol. 7 No. 4 2007年 3月

## 鷺の宮卓話

所長 太田敬雄

「催花雨」（サイカウ）という言葉があるようです。春先に降る雨のことで、花の開花を促す雨というような意味らしいです。この表現を知ると、それまでの春先の雨が持っていた寒く冷たい、冬に逆戻りするようないやなイメージが払拭され、その雨に花を待ち望む前向きな気持ちでウキウキすることが出来るようになります。

そこに言葉が持つ力があります。数学もコンピューターのプログラムも「言語」としての特性を持っていますが、それらの記号的言語には無い「心」が「言葉」にはあります。キリスト教の聖書に「初めに言（コトバ）があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（新約聖書ヨハネによる福音書1：1）と記されていますが、この言（コトバ）は決して物の名称や色々な現象を表現する記号ではなく、そこに「心」が伴うのだと思います。しかも、この聖書の言葉は特定の文化や習慣、あるいは個人の感情を超えて宇宙を支配する「心」と「意思」の存在を告白している信仰の告白の言葉です。

しかし、私たち人間には自分の個人的な「心」や、自分が育てられてきた文化の持つ人の在り方に関する「刷り込み」を超越した大きな「心」はなかなか分かりません。実はそこに多文化理解と交流の問題点があります。

私たちは言語を翻訳・通訳すれば、あるいは複数の言語を習得してマルチリンガルになれば、文化の壁は越えられると思いがちですが、一般的な翻訳や通訳ではなかなか「心」は伝わらないものです。記号としてのコトバは翻訳できても、そこに付随している心や思いを同時に伝える（訳す）ことは殆ど不可能だからです。

その一番身近な例が外国のコメディを理解することの難しさに表れます。笑いは基本的に翻訳できない。元の笑いと同質の笑いを伝えるためにはコトバは全く別の言葉を使い、別の話にするしかないことが多いものです。

多文化理解・交流の場でしばしばこの問題に突き当たります。文化的な違いを知ること無しに翻訳・通訳すると、例え文法的にそれがどれだけ正しく訳されていたとしても通じなかったり誤解されたりしてしまうのです。にもかかわらず、私たちはどうしても「正しく」訳す事に専念し、それさえ出来れば伝わると思ってしまいます。

文章を正しく訳す以前に、心を・思いを正しく伝える。それには簡単な方法はないのでしょう。私は、そのために信頼できる交流の場として共に生活し、共に食べる場を創り、そこでの交流を通して理解を深める。理解が深まると共に交流もまた深まるというような方法を取るよう努力しています。その中で、例えば「催花雨」のように前向きに物事を捉える言語を大事にして理解・交流に取り組む姿勢を保ちたいと思います。

## 「森の有無と文化の関係 ～特にアジアの文化について～」

昨年9月30日、当研究所とNPO法人森の文化フォーラムとの合同研究会という形で坂口春海さんのお話を伺いました。この研究会は国際比較文化研究所としては初めての東京での研究会で、副所長栗原優氏の駿河台大学の御茶ノ水校舎を会場にお借りしました。

坂口春海氏は高崎高校卒業後にアメリカ留学、大学卒業後長年海外で活躍。1978年から2004年にかけて国際連合開発計画の職員としてジュネーブの国連ボランティア計画本部でアジア太平洋地域を担当、またニューヨークUNDP本部で中国、モンゴル、インドを担当して来られました。現在は高崎在住です。

この研究会に参加された方たちから寄せていただいた感想をここに掲載させていただきます。

### 1、千木良和子さんから

人は顔に人生が表れるといいますが、坂口さんはまさにそういう方です。例えばTVで以前観たことのあるヨットの世界一周を達成した冒険家、またはアルピニストに通じる顔の輝きをお持ちです。（単に日焼けしているというのではありません。）

坂口さんは私達が通常行かない（行けない）知られざる第3国と云われる国々に赴任され、開発のお仕事に携わっていらっしゃいました。そういう国の様子を語る坂口さんの瞳には悲惨さという“曇り”は見られません。むしろ、その地で実体験した人だけが持ちえる深い愛のようなものにあふれていました。

お話の中で特に興味深かった点は2つあり、1つはアフガニスタンのお話。アフガニスタンというと長く続いた戦争、紛争の末、廃虚と化した街やゲリラが潜伏、岩だらけの山というイメージを持っていましたが、実際、木の生えるエリアもあるし、「カレズ」（昔アフガン（アフガニスタン？）の人々がつくった地下水動（？）のこと。）もあるそうです。アフガニスタンはペルシャ絨毯の色彩と同じ景色を持ち、美しい国ですとおっしゃったのが何よりも印象的でした。

もう1つは「色々な国を回って色々見てきたけれど、日本は自分にとってチャレンジの国である」というお言葉。坂口さんはずっと日本を離れていました。2年前その長い旅を終えて、日本に落ち着かれたということです。実は坂口さんの思いは私にとっても大きなテーマなのです。仏人の夫を持ち、色々な国に移り住んで去年やっと日本に帰国（子供にとっては初めての在住）を果たしました。日本は他の国にはない複雑なシステムで事が動いているように思います。（特に人間関係。組織や団体の中に入った時、感じます。）私はまだ答えを出せないで1年が経ってしまいましたが坂口さんの今後の展開を非常に興味深く、そしてご期待しております。

### 2、近藤佳代さんから

お話の冒頭で坂口さんが「テーマは“森の有無と文化の関係”となっていますが、今日は特に“森の無い文化”について話をしてみます。」とおっしゃるので私はとまどいました。

何故なら、日本は“森”だけではなく豊かな自然と共に生きてきた国で、そこで生まれ育った私には“森のない文化”は想像しがたいからです。が、お話を聞いているうちの“森のない文化”を想像するのではなく、あらためて日本に森があることに感謝し、これを守り、次の世代に受け継いでゆくことの大切さを再認識しました。

坂口さんは国連の開発計画というお仕事に携わる中で、パプアニューギニアに滞在したことがあり、豊かな自然を持つこの国の子供達が、教育水準の低さが問題となっている中で生き生きとしていたのが印象的だったそうです。

お話は多岐にわたり、沢山のことを考えながら聞いていましたが、私自身が子育てをしているので、この話は特に印象的でした。

“今の子供達は教育レベルは高いけれど、目に生気がない子が増えている。”これは自分が子育てをしながら日々気にかかっていることです。削られ続ける日本の緑と今の子供達。“決して無関係ではない”と思いました。

“もっともっと子供達を自然の中に”

“もっともっと子供達に日本の文化や歴史を学ばせたい”そんな願いをお話を聞いて更に強くしました。

今回初めての東京での研究会を開催していただき、感謝しております。また「時間が足りない」と参加した皆さんがおっしゃるくらい様々な角度から意見や質問が飛び交って、自身も色んなことを考えることができました。

「人前で話をするのは苦手なんです。」と言いながら貴重な体験をお話して下さった坂口さん、本当にありがとうございました。

### 『ぐんま見聞録』の「協働の現場から」

今年1月26日号の群馬県のインターネット上のニューズレター「ぐんま見聞録」に太田の取材記事が載りました。お気付きになられなかった方も多いためここにも再録しておきます。なお、紙面の都合で写真は省略しました。

---

国際交流がすすみ、多くの文化と接する機会が増えた今日、文化の違いが引き起こすさまざまな誤解が存在します。互いの文化にふれ、文化を知ることにより、そうした誤解を解消し、理解しあおうと活動している団体の1つがNPO 法人国際比較文化研究所です。

今回は同研究所所長の太田敬雄さんにお話を伺いました。

---

### きっかけ

県内の短期大学で教授として英語を教えていたころから、学生や一般の方に接する中で、日本人は違う文化を理解するのがものすごく下手だなんて思っていました。外国人と交流しよう、違う文化を受け入れようっていう気持ちはあるんだけど、実はそれができていないんですよね。多くの人に違う文化を理解してもらうためには、学校の中だけで啓発活動を行うのではなく、外でも行わなければだめだと思うようになったんです。

それで、わたしの考えに共鳴してくれた人たちに相談して、2000年に国際比較文化研究所を設立しました。「相互理解に基づいた、より豊かな平和な地球を創(つく)るために」という大きな目標を掲げてね。

### 文化の違いによって生じる誤解

外国人の目線はずさずにするお辞儀に違和感を覚えたことはありませんか。握手の習慣を持つ外国人にとっては、あいさつは目線をあわせて行うものなんです。だから、目線はずして深々とお辞儀をするという日本のあいさつは、かなりの親日家の人でも行うのは難しいそうなんですよ。

同じようにわたしたち日本人も握手圏の外国人に不信感をあたえていることがあります。外国人と握手をした時、手が痛く感じた経験はありませんか。それは握り方が足りないからなんです。握手をする時は力を込めて行わなければいけないんだけど、日本人にはなかなかそれができない。相手に握らせて、自分は力を入れていないってことは、握手圏の人たちにとっては失礼なことなんです。おまけに日本人は目線もはずしてしまう。これでは握手をし終わった時点で、完全に相手に不信感を持たれちゃうんですよ。

日本人が日本的な握手をしてもいいんだけどもそれにはどういう意味があるのか。外国人が日本人と違うお辞儀をするのはなぜか。このような文化の違いを、一つ一つ互いに知ることができたら、

本当の意味での理解が深まるのではないかと考えています。この研究所の活動の中で、できる限り広めていきたいですね。

### **多文化交流プログラム**

研究所では、多文化理解のための研究会や講演会の開催、外国語講座の運営、会報誌の発行などさまざまな活動を行っています。

多文化交流プログラムもその1つです。これは、海外の大学で日本語を専攻する学生と日本の大学で異文化コミュニケーションなどを学ぶ学生の交流の場を提供しようという活動です。

例えば、2002年に、日中韓3カ国の学生を群馬に集めて実施した、日本語で交流を行うという「多文化交流 in ぐんま」。日本からは他県の学生に参加してもらいました。群馬の学生がよその学生を受け入れるのではなく、三者が対等な立場で交流ができる環境にしたかったからです。

対等な立場で群馬に集まり、二文化間の交流ではなく多文化交流を体験してもらう。ホームステイをしたり、地元企業の人たちと交流を図ったり、お祭りに参加したりしながら。また、卒業後、日本との関わりの中で仕事をしていく海外の学生に、日本を知ってもらうことは意義の大きいことだと思うし、何よりも、ただ単に日本に来た、群馬に来たというのではなく、群馬の人とつながりを持ったということが大切なんですよね。一度つながりを持つと、帰国した後も交流は続いて行くんですよ。

本当はこの形で活動を継続していきたくはありますが、日本で行うのは経費がものすごくかかるとは思います。だから今後は、日本の学生が海外へ行き、海外の学生と日本語で交流したり、海外の文化にふれたりという形で実施していこうと思っています。

先日は台湾で行きました。最終日に参加者たちがみんな、帰りたくないって言うんです。それだけいい経験がいっぱいできたんだと思います。台湾は2泊3日で十分だという人がいます。確かに観光で行くのなら十分なのかもしれません。でも人と人とのふれあいを考えた時は、1週間でも2週間でも時間は足りないんです。大事なことは何を見てきたか、何を買ってきたかではなくて、人々と交流を図ることによって、その国を好きになってきたか、ってことだと思うんです。今後こういった体験ができる場を提供していきたいですね。

### **文化にふれる留学を支援**

留学に関しても同じことが言えると思います。海外に留学して、その国が嫌いになって帰ってくる日本人はたくさんいます。逆に、日本に留学して、日本が嫌いになって帰っていく外国人も山ほどいるんです。こんな悲しいことはないと思いますね。そうならないためには、ただ言語を習得するために行くのではなく、その国の文化にふれ、それを受け入れ、好きになっていくことが大切なんだと思います。

わたしも以前アメリカへ留学し、大変良い経験をさせていただきました。だから今でも「アメリカへ行く」のではなく「アメリカへ帰る」という気持ちです。常に「日本へ帰る」、「アメリカへ帰る」という心理状態なんです。だからこれから留学する人にも同じ思いを持ってもらいたいですね。また、同じ思いを持つことができるような留学を支援していきたいと思っています。

#### **これから**

すべての文化を受け入れるのは大変難しいことです。でも、実際に何らかの形でその文化に接していくことにより、自分の文化が相手の文化とどこが違う、どこが共通しているのかを知る。これが相互理解のためには必要なことだと思います。

今後も、時間が許す限り、多くの人にそういう機会を提供し続けていきたいですね。

---

(聞き手 伊丹) 群馬県庁 企画担当 広報課 〒371-8570 前橋市大手町 1-1-1

わざわざ研究所まで出向いていただいたの取材、有難うございました。

<事務局より 記事訂正> 2006年の7月3日号のニューズレターで、会費納入者のお名前が間違っておりました。「森村英司」氏は「森泉英司」氏の間違いでした。お詫びして訂正させていただきます。

## 「韓国語・韓国文化入門講座」 受講生募集!

国際比較文化研究所では、2006年度の韓国語入門講座に引き続き07年度講座を開催します。また語学実習と文化研修を兼ねた韓国旅行も11月に計画しています。仲間と楽しく韓国語を学びませんか。

### 記

- 1、期 間： 2007年4月～9月（20週）
- 2、開講予定：毎週水曜日 午後7時～8時40分（10分の休憩を含む）
- 3、定 員：25名（先着順）
- 4、場 所：安中市文化センター 2階 第3会議室（予定）
- 5、経 費：実費徴収 20,000円（後期から始める人はプラステキスト代。）
- 6、講 師：韓国語 朴 惠 蘭（パク・ヘラン）先生 韓国生活文化 田中福姫
- 7、募集期間：2007年3月31日まで（4月第2週から始めます。）
- 8、その他：韓国研修旅行については後日計画する予定です。

### 申し込み先

主催：NPO法人 国際比較文化研究所

379-0124 安中市鷺宮 3413-3

所長 太田敬雄

FAX 027-382-6393

講座責任者 田中福姫  
 申込先 379-0135 安中市郷原 2961-1  
 電話/FAX 027-385-1685  
 携帯 090-4823-8593

.....キ.....リ.....ト.....リ.....

### 韓 国 語 入 門 講 座 申 込 書

受 付 日	年 月 日	受付番号
ふりがな		
氏 名	印	性別 男 ・ 女
生 年 月 日	年 月 日 ( 歳)	
住 所	〒	
電 話 番 号	自宅 FAX	携帯
職 業		

## 「中国語・台湾文化入門講座」 受講生募集!

中国語を学び、台湾の文化を知り、台湾の人たちと交流したい!

中国語と台湾文化の入門講座が、いよいよ安中で始まります!

多文化理解と交流の分野で実績のある NPO 法人国際比較文化研究所が、その活動の一環として自信を持って皆様にご提供する講座です。

気の置けない仲間と一緒に、楽しく言葉と文化を学びましょう。2008年1月には語学実習と文化研修を兼ねて台湾での多文化交流プログラムも計画しています。

### 記

- 1、期 間：春期講座 2007年5月～8月(15週)
- 2、開講予定：毎週 木曜日 午後7時～8時40分(10分の休憩を含む)
- 3、定 員：25名(先着順)参加者10名以上で実施
- 4、場 所：安中市岩野谷公民館
- 5、経 費：実費徴収 15,000円(1回1000円)
- 6、講 師：中国語 陳 怡 真(CHEN YI-CHEN) 先生  
台湾の生活文化 小 川 碧 如 (群馬県台湾総会婦人部長)
- 8、申 込：主催者宛、下記申込書をファックスかメールでお送り下さい。
- 9、講座開催予定日：5月10日～8月23日。8月16日は休講。31日は予備日。
- 10、多文化交流 in 台湾 2008：後日計画を作成して募集します。詳細は下記まで。
- 11、主催：(申込先)NPO 法人 国際比較文化研究所 〒 379-0124 安中市鷲宮 3413-3  
所長 太田 敬雄 fax:027-382-6393 [メール: mtharunac@xp.wind.jp](mailto:mtharunac@xp.wind.jp)  
.....キ.....リ.....ト.....リ.....

### 中 国 語 入 門 講 座 申 込 書

受 付 日	年 月 日	受付番号
ふりがな		
氏 名	印	性別 男 ・ 女
生 年 月 日	年 月 日 ( 歳)	
住 所	〒	
電 話 番 号	自宅 FAX	携帯
職 業		

## 多文化交流 in マラン (インドネシア) 2007

特定非営利活動法人国際比較文化研究所では、異なる文化間の相互理解と心の交流を目指した交流プログラムを実施してきました。今夏はインドネシアのマランで実施します。

今日の世界情勢の中で、特に理解と交流を深める必要があるのがイスラム文化です。日本のイスラム文化に関する報道はあまりにも偏っており、私たちは本当のイスラムの方々の姿を知りません。そこで、今年はインドネシアで交流プログラムを持つことにしました。マランの大学で日本語を専攻する若者達と日本語での交流を中心にインドネシア文化を学びつつ交流の時を持ちます。

### 記

- 1、 期 間：2007年9月4日(火)～9月12日(火) 8泊9日(含機内1泊)
- 2、 行 先：インドネシアのマラン市
- 3、 宿 泊：未定(ホテル宿泊希望者は別途追加料金を徴収。)
- 4、 募集人数：上限を20名とし、10名以上で実施。
- 5、 参加資格：18歳以上の健康な人 使用言語：日本語
- 6、 経 費：13万円～15万円(予定)
- 7、 主なプログラム：大学生との交歓会、大学生によるインドネシア語と文化の授業、プロモ山一泊旅行、その他の文化体験活動(現在マランで企画中)
- 8、 日 程：9月4日(月)成田集合 12:00  
09/04 BR2197 東京(成田)発 台北(桃園)経由スラバヤ着・泊  
09/05 バスにてスラバヤからマランへ 09/05～10 各種プログラム  
09/11 BR232 スラバヤ発 台北(桃園)経由 09/12 成田着後解散
- 9、 オーガナイザー：マラン在住の菅ヶ谷マコさん(元ブラウイジヤヤ大学日本語講師)
- 10、 主催(問合せ先)：NPO法人国際比較文化研究所 担当旅行社：H I S
- 11、 参加申込：メール、郵送またはファックスで：氏名(ふりがな)性別、年齢、職業(学校名)、郵便番号、住所、電話、メールアドレスを記し、パスポートのコピーと共に6月15日までに申込。
- 12、 注)後日、参加申込金5万円を6月末日までに振込んでいただき、残金は詳細と総額が決定後、8月5日頃までにご用意願います。追って詳細をご連絡しますが、参加ご希望の方は研究所までメールもしくはファックスでご連絡下さい。

## 2006年度・2007年度の活動について

昨年7月にニューズレターを発行するまでは「今年は順調に活動ができています」と喜んでおりましたが、9月に入り授業が忙しくなると共に余裕が無くなり、ニューズレタ

一の発行も出来ないままに年度末を迎えています。

5ページ～7ページに記載しました講座や交流プログラムももっと早く皆様にお知らせしなくてはと「気持ちは焦れども」動きが取れないままだったことをお詫び申し上げます。申込期間は短いです。特に韓国語講座は時間がほとんどありませんが、興味のある方は急ぎお申し込み下さい。

**韓国語講座**の朴先生は群馬県立女子大学でも教えておられるプロ。昨年度から研究所の講座の指導もお願いしていますが、受講生の皆様の評判が大変よく、喜んでおります。

**中国語講座**の陳先生は愛知教育大学で日本文学の修士を取られた先生で、昨年から安中にお住まいです。今年の1月に研究所主催で台湾との交流プログラムの立ち上げをご尽力いただきましたが、参加者にも大変評判の良い先生でした。現在は翻訳などのお仕事をしておられますが、中国語の指導の経験もおありです。

**多文化交流 in マラン 2006**は昨年度も計画したのですが、こちらの準備が遅すぎて参加者募集の期間が足りずに断念しました。企画立ち上げにマランの方でご尽力いただいた荒井美幸さんには大変ご迷惑をお掛けしてしまいました。荒井さんがマランに居られる内に立ち上げたかったのですが、間に合いませんでした。今年**多文化交流 in マラン 2007**を荒井さんにマランでご紹介いただいた菅ヶ谷マコさんに現地コーディネーターをお願いして実施することになりました。

**名作の舞台裏 in ぐんま** さて、前後しましたが昨年度、秋には全国ボランティアフェスティバルが群馬県で開催され、当研究所は「名作の舞台裏 in ぐんま ～『車輪の一步』から見るボランティア活動の流れ～」をぐんまNPO協議会と放送人の会、財団法人放送番組センターとの共催で立ち上げました。2006年11月4日、脚本家山田太一氏、演出家中村克史氏、出演された俳優からは斎藤洋介氏、斉藤とも子氏を向かえての大イベントを成功裏に終えることが出来ました。

1979年のNHK放送作品、山田太一脚本の『男達の旅路』シリーズから車椅子生活者を取り上げた「車輪の一步」は今見ても新鮮で、障害を持った方々と共に生きる事について大いにかんがえさせられました。

「**多文化交流 in 台湾 2007**」を1月に実施しました。日本からの参加者は6名の大学生でしたが、台湾で日本語を学んでいる若い社会人や学生との交流は実り大きいものでした。帰国後2人の台湾での参加者が来日、数日間の交流を深めました。

<編集後記>都合により会費納入状況を次号に回させていただきます。2007年度も研究所の活動を支えて下さいますようお願いいたします。

**Newsletter 発行：特定非営利活動法人国際比較文化研究所**

事務所：〒379-0124 群馬県安中市鷲宮3413-3

電話：027-382-5998 FAX：027-382-6393

e-mail：[mtharunac@xp.wind.jp](mailto:mtharunac@xp.wind.jp)

郵便振込口座番号：00510-0-61974 名称：国際比較文化研究所